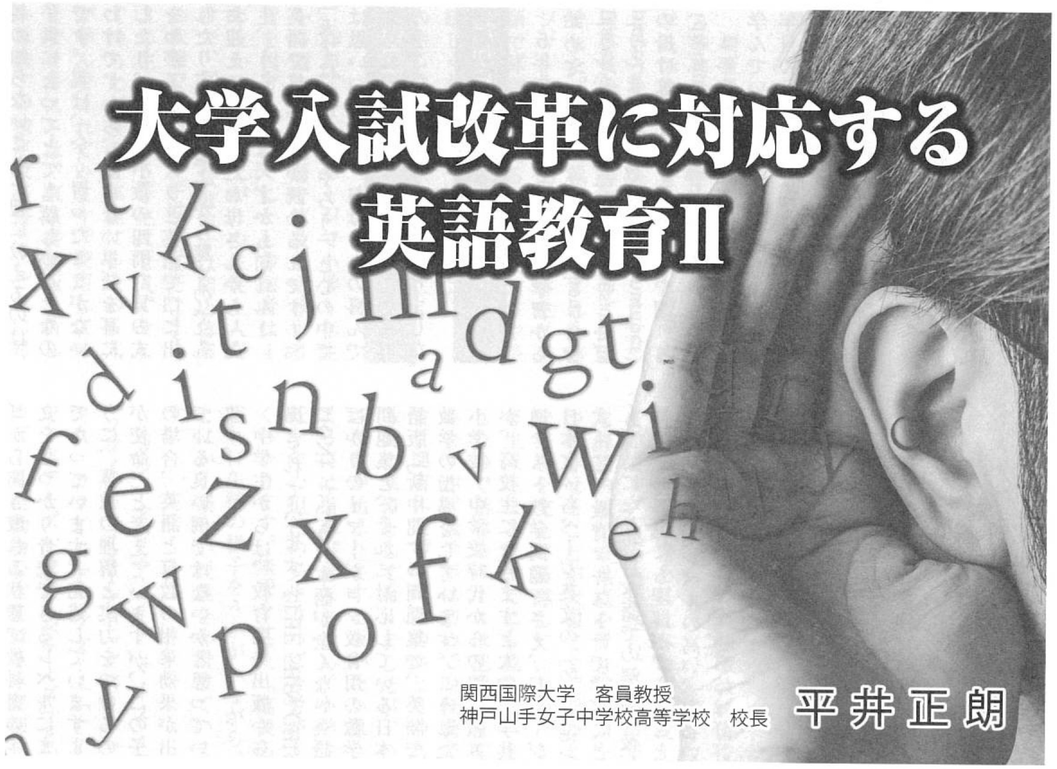

# 大学入試改革に対応する英語教育Ⅱ

関西国際大学　客員教授
神戸山手女子中学校高等学校　校長
平井正朗

大学入試は取りたい生徒像によって作問ポリシーが変容する。大学入学共通テストも同様。かつての大学入試センター試験と比べると、英文量が大幅に増加し、テーマに対する複眼的視点となる資料やデータなどを的確に読み取る情報処理能力が求められている。知識偏重を廃し、学んだ知識を活用し、「主体的・対話的で深い学び」という言い方は違っても以前から言われてきたことである。入試問題も不易流行。変えてはならないものと変えなければならない設問がある。時代の変遷と共に、入試問題も変容していくが、本質を見極める力の育成に主眼を置いた教育実践はいつの時代も同じである。

## 1. 大学入試問題を振り返る
### ―事例研究：京都大学の場合―

2023年度の京都大学の英語の入試問題（前期）は大問4題、ⅠとⅡの読解問題は英文和訳のみ、ⅢとⅣの英作文は和文英訳と字数制限つき条件英作であった。読解問題は、下線部和訳だけとなった。Ⅲは全文英訳であったが、分量が減り、Ⅳは会話文の下線部にあてはまる英文を書く自由英作。読解問題がすべて英文和訳になったのは2014年以来である。大問Ⅰはインターネットによる情報過多の時代、大問Ⅱは意識が主なテーマ。基礎的な語彙力に基づき、複雑な構造の英文を読み取り、適切な日本語で表す力が求められた点は従来型の形式と言える。学問を志す大学生にとって、入学後、原書講読が研究に不可欠なものであるというメッセージになっていたことは疑う余地がない。

大問Ⅲは、「情けは人のためならず」という格言の意味を英語で表現する問題（2014年度は「生兵法は大怪我のもと」、2021年度は「転ばぬ先の杖」）。文章全体を読み、「損得勘定で動く」「便宜を図る」「恩に報いる」「人の世の真理を突いた言葉」など、日本語の論理で書かれた文章の大意を的確に英語で表現する力が試された。大問Ⅳは、white lies（罪のない、人を傷つけないためにつく嘘）の具体例など、それが社会にとって必要な理由を英語で表現する問題。文脈論理を把握し、文意を的確な英語で表現する力が求められている。2つの英作文問題の底流には、新学習指導要領の「思考－判断－表現」する力の測定が散見された。

## 2. 4技能の習熟に向けて
### ―聞く・読む・書く・話す力の相関

単語やイディオムを知っているだけでは正確なリスニングには習熟できない。また、カンのよさだけでなんとかなるというものでもない。英語は単語が横一列に並べられた構造になっているが、単なる単語の集合体ではなく、一定の規則に基づく構造となっている。まずは、文レベルの構造が認識できるようになること。それがひいては長い文章理解にもつながっていくのである。リーディングは文字情報を頭の中で音声情報に置き換え、さらに意味理解していくものであるから、まとまった内容をチャンクごとに切りながら音読し、生徒にそれを聞かせて意味をとる練習が必要となり、それが自然にリスニング力も強化する。

ライティングを上達させるには、定型表現やコロケーションといった語のまとまりをチャンクとして処理できるようになることが第一歩であると言われている。頻度の高い表現がコーパスで検索できるようになったこともまた大きな助けになっている。外国語としての英語を学ぶ場合、学習者の思考を言語化する過程において認知に負荷がかかりすぎてしまうと停滞すると考えられている。これまでの研究では、発話思考法、直接観察、書き手の追観、書かれた作文の分析、ビデオ・モニタリング等のいずれか、あるいは複数の手法を組み合わせるのが一般的であった。近年ではコンピュータ・プログラムに着目したデータ収集を行うなど、様々な工夫が重ねられている。言語経験が豊富な母語の場合、状況に適する語彙検索や構文産出は容易なはず。しかし、外国語を学ぶ場合、母語話者と比べると、使用頻度が少ないことは言うまでもない。よって、思考を言語化していく過程で、文法に基づく処理を行うだけでなく、ストックされた定型表現を活用することによって負担を軽減できるのもまた事実なのである。作文が借文と言われる所以である。

スピーキングは、①自分が発言したい内容をまとめること（conceptualization）⬇②言語化（formulation）⬇③言葉を一時的に蓄える緩衝記憶（buffer）⬇④音声化（articulation）⬇⑤音声をモニターするフィードバック（self-monitoring）という5段階を経て実現されると言われている。それに加え、コミュニケーション力を豊かなものにするには、状況に応じて適切な表現を選択する社会言語学的能力（sociolinguistic competence）や談話的能力（discourse competence）、背景知識、論理的思考力などもブラッシュアップしなければならないのである。

## 3. 時代が求める指導
### ―思考・判断・表現する力の育成

リテリング（retelling）という手法がある。これは、英文を読んだ後、本文を見ずに、その内容を第三者に語ること。一般的には、本文読解後、テキストを閉じて行う。相手がまったく知らない内容をわかりやすく伝え、理解してもらうことがねらいであるから、英文の情報を頭の中でいかに整理し、そして、いかに表現するかがポイントである。まとまりのある英文を読み、リテリングを行うとスピーキングにつながり、逆に、リテリングを聴くことがリスニングにつながるという相乗効果が期待できる（聴く姿勢を養うことも重要）。その意味で、リテリングがポスト・リーディング活動として有益であるのがわかるはずだ。スキル・アップの秘訣は、情報処理能力とそれを土台にした表現力、そして、なによりも伝えたいという意欲の醸成である。

リテリングの〝強み〟は、本文の情報を伝えるだけでなく、話し手の背景知識を統合して状況全体が表現されること。相手の理解度を高める手段としては、1枚の絵を使ったpicture description、図や表にまとめる情報転移（information transfer）などがあり、アプローチは様々。大切なのは、話し手が頭の中で情報をまとめ、伝えたいことを言語化し、自身の理解をより深められることなのである。